
桜の下の約束

赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の下の約束

【Nコード】

N4575U

【作者名】

赤

【あらすじ】

妖怪を目に写す事が出来る少女真実。そのせいで学校ではイジメを受けている。町を歩けば、冷たい目で見られる。そしてある日。公園のブランコで、一人で泣いていた真実。

その泣いている顔を妖怪の男の子に見られて!?!?..。

キャラ紹介

名前：本条 真実 ほんじょう しんじつ

年齢：15歳

性別：女の子

性格：生意気、強がり。

その他：妖怪を見ることが出来る。

自分の名前をとて嫌っている。

妖怪が見えることで他人からはイジメに合ったり。

他人からは冷たい目で見られる。

名前：弧華 ろか

年齢：不明 見た目は高校一年生。

性別：男の子

性格：優しい、生意気、心配性。

その他：妖怪の少年。

妖怪だけど人型の妖怪。

妖力が高い。真実に興味を抱き、気に入る。

いつも、布に刀を入れて持ち歩いている。

1章 人間と妖怪

『化け物!』

『嘘つき!』

『悪魔!』

『気持ち悪い子ねえ!』

いつも私は、そんな事を言われて生きてきた。
何もかもを捨ててまで、何もかも自由になれなくて…。
小さい頃から、妖怪が見えた。
そのせいで…他人からは冷たい目で見られた。

「はあ…朝か…」

この少女の名前は『ほんじょう本条 しんじつ真実』
制服を着て、外に出た。

「あの子よ、変な子。」ボソッ

「何か、気味が悪いわね。」ボソッ

言いたかったら、大声で言えればいい!…

「クッ!」

真実は走った。

ただ、誰も居ないところへ行った。

ギーコッギーコッ

真実はブランコに座っていた。

ポタンッ…。

真実の目には、涙が零れ落ちていた。

「泣いてるのか？」

「えっ？…。」

真実のちよつと年上のような感じの男の人が話しかけてきた。

「べ！別に泣いてないんか無い！」

目をこする真実。

「人間は面白い。」ニコッ

「お前…妖怪…か？。」

「そうだ！」ニコッ

「！？…。」

ドンッ！

真実は妖怪と名乗る少年を押した。

「何すんだよ！」

「ハア…いや！…。」

「あっおい！」

真実は走った。

何で見えるんだ！何で私と同じ人間が存在しないのか！

パシッ！

「！？…。」

誰かが真実の手をつかんだ。

「ちよつと待て。」

「！？…さっきの妖怪！？」

2章 心

『化け物はちゃんとお払いしてどこに行かないと駄目ですよー!』
『近寄らないでよ! 気持ち悪いんだから!』

『何嘘ついてるんだよ! お前そんなに人に構ってほしいのかよ!?』

そうだ…昔から…妖怪を見ることが出来た。
そのせいで…私は…。

「放せ!」

「俺の姿は他人に見える!」

「!?!?…。」

「俺、妖怪だけど。妖力が特別強いから…。」

「……もう…私に関わるな!」

「何で?」

「私は…」

「ならさ。」

「……。」

「俺が守ってやるよ! 真実を!」ニッコ
ドキッ!

「!?!?…。」

真実は頬を赤くした。

「あっー赤くなっただー」

「なってるない!」

「よろしくな! 真実!」ニッコ

「名前…。」

「俺の名前は…弧華」

「弧華…。」

「よろしくな！真実！」ニコッ
「おう。。」

それから一週間…。

短い…一週間…それが私に達に限られた時間だった…。

3章 一週間

私はある日…とても大切な事に気づいてしまった。

一度本で読んだことがあった。

妖怪を見えなくなる方法を探していた時に見た本。

それは…

妖怪は人と関わりと出会ってから二週間しか生きられないと…。

私達が出会ったのは一週間前…弧華の寿命は後…
一週間…。

「真実…起きろよー」

「ん？弧華か？…なんだよ…もうちょっとだけ寝かせろ…。」

「はあ…しゃーなしだからな。」

「zzzz」

「寝るの早ッ！」

相当疲れてるなこりゃ…。

この一週間弧華は真実を振り回しっぱなしだった。
真実も相当疲れが溜まっていたのだろう。

「なあ…弧華。」

「起きてたのかよ？」

「お前…後一週間で死ぬのか？」

「えっ？何で？」

「妖怪は人間と出会って二週間で死。私達は出会ってもう一週間。」
「そうだな。まあそれは本当に話だな。」

「!？」

「だけど俺は死より真実のそばに居たいと願ったんだ。」

「!?...」

「この命別に尽きても後悔はしないぜ!」ニコッ

「だけど...」

「どうした? 妖怪嫌いの真実らしくねえーな」ニコッ

「笑い事ではないぞ!」

「知ってる。だけどいいんだ。俺は。」

「なぜだ!」

弧華が真実の隣に寄る。

「俺は、人間が好きだから。人間のために死ねるのがとても嬉しい

んだ」ニコッ

「!?...」

「だから、俺真実も大好きなんだぜ!」ニコッ

「なっ!?...」

真実は顔を真っ赤にさせた。

「一週間まで、俺は真実のそばに居る。真実を守るから」ニコッ
「そうだな...」

4章 昔と今の訪問者。

『化け物！近寄るな！お前なんか死ねばいいんだよ！！！！！！』

『気色悪い！キモイ！近寄るなよバーカ！』

『触るな！気色悪ッ！』

そうだ…昔から私は妖怪を見ることで人にバカにされ傷つけられてきた。

とても苦しかった…寂しかった…悲しかった。

親にさえも…捨てられ…。

私は気持ち悪いんだって…自分でも自覚している。

そして知らないおばあちゃんに拾われた。

だけどそのおばあちゃんも私が高校に入ったら死んでしまった。

悲しかった…寂しかった…。

その人だけが私を信じてくれた…。

信じてくれる人がいて…嬉しかった。

だけど今でも妖怪が見える…。

だけど今は妖怪と一緒に居る…。

ポロツ…。

「真実？」

眠っている真実の目には涙が零れ落ちていた。

ピンポン

「人？…誰だ？」

「zzz」

「真実寝てるし、俺出るかはーい？」

ガチャッ

玄関のドアを開けた、弧華。

「あぁー本当に居たんだな。」

「??…。」

「怨！」

「!?!?…うわぁ！」

「ん?!…弧華?!…!?!?」

真実は立ち上がった。

「弧華！」

「真実…来るな！」

「弧華！」

「人間か。もう大丈夫です。この妖怪を祓いに来ました。」

「やめろ!?!?!?!?!?!?!?!」

「!?!?…。」

真実は弧華に抱きついた。

そして光は消えた。

「ハア…ハア…ハア…。」

「弧華！」

「今の力は…。」

妖怪を助ける人間。

「その妖怪は妖力が少しずつ減っていく。それだけ忠告していく。
では。」

「弧華!?!?!?!?!?!?!?!」

あの娘…どこかで…。

パシッ！

「！？…。」

真実は男の手をつかんだ。

「待て！お前…昔…！？」

「……。」

5章 自分の名前と本当の真実

「…真実。」

「!?!。」

突然男が真実の名前を呼んだ。

「ハア…ハア…真実…。」

「弧華!」

パシッ!

「!?!。」

男が真実の手をつかんだ。

「その妖怪。もうすぐで死ぬぞ。」

「!?!。」

「妖怪と知り合いなど貴様人間なのに、どうしてだ。」

「私は。何もいらない!だから弧華のそばに居たいんだ!」

バタンッ!

「弧華!」

「やめておけ。」

「えっ?!。」

「貴様にとっては、一週間と思っているがな。」

妖怪にとってはとても辛い事などだ!」

「!?!。」

「妖怪は一日ずつカウントされ、妖力をなくしていく。」

「いずれ、立てなくもなり、喋れなくなる。」

「!?!。」

「あの妖怪もそうだ、今ので相当な妖力を消費した。」

「生きられて三日だ。」

「!?!。」

真実は衝撃な事を聞かされて焦る。

「全て、貴様が悪い。あの妖怪ももう少しは生きたいと願っている。」

なのに、貴様があの妖怪の命を奪ったのだ。」

「!?!?。」

ポタンッ…。

「どう…したら…助けれる?…。」

「何?」

「どうしたら!助けれるんだ!」

真実はなくのをこらえて聞いた。

「貴様があの妖怪の事を忘れて、姿を消し、一生妖怪を見えなくなると生きられる。」

「!?!?。」

「貴様は特別妖力も強い。だから貴様が望めば、妖力もなくなる。」

「!?!?。」

「俺はもう行く。じゃあな。」

男は消えた。

ポロツポロツ

真実の目には涙が零れ落ちていた。

私が消えれば…全て住む事なんだな…。

パチッ

「真実?…。」

「弧華、目が覚めたか?」

「どうした?目が赤いぞ。」

「!?!?。」

「あの男に何か言われたか?」

「…弧…。」

「真実、俺はお前に出会って後悔してないし、別にこの命お前のためなら、捨てても構わない。」ニコッ

「!?!?。」

ポタンッ

「真実?!」

「弧…華…。」

「ん。」

真実は弧華に抱きついた。

「行かないでよ…死なないでよ…弧華…。」

「消えない…俺はずっと真実のそばにいるから。」

「弧華…。」

6章 桜の木

チャリンッ…リンッ…。

鈴の音?…綺麗な音だな…。

弧華…ごめんね…。

パチッ

「真実!…ゲホッゲホッ!」

「弧華?…大丈夫?」

「ああーおう…ゲホッ!」

弧華は妖力は日に日に落ちて行つた。

「真実。」

「ん?」

「あれ。」

「えっ?…!?…。」

真実の家の庭に大きな桜の木が生えていた。

「幻覚?」

「いや…俺の妖力…。」

フラッ!

「弧華!大丈夫?」

「おう…。」

弧華は顔色が悪かった。

「何で…。」

「真実は…桜の匂いがして…桜のよつに…綺麗だから。」
「なっ!?!」

眞実 は顔を真つ赤にさせた。

「眞実。」

「ん？…。」

バサッ

「！？…。」

弧華 は眞実に自分のマフラーをかけた。

「お前にやる。」

「だけど…。」

「やる！」ニッコッ！

「…弧華…。」

ポタンッ

「眞実…ごめん。」

「弧華…。」

眞実 は弧華に抱きついた。

死んで欲しくない…いつまでも一緒にいて欲しい…。

「ご…めん…。」

「死なないでよ…。」

「！？…眞実…。」

「いつまでも…私のそばでいてよ…なんで消えちゃうの？…何で…
なんで…。」

「ごめん…。」

弧華 はただ…私に謝っただけだった…。

桜の花びらは…とても綺麗に落ちていた…。

6章 桜の木（後書き）

次回最終回です！

（何か中途半端ですみません）

最終章 桜の下の約束（前書き）

最終回です！

最終章 桜の下の約束

弧華…今までありがとう…また会える日まで…。

「弧華！」

「ゲホッゲホッ！」

「弧華！大丈夫！？」

「ゲホッ…おう。」

弧華はもう弱り果てていた。

時間がない…。

「真実…。」

「何？」

「お願いが…ある…ゲホッゲホッ！」

「何？…私にできることなら何でも…。」

「…木…。」

「えっ？」

「桜の…木…の下…。」

「うん。」

「連れて行ってくれないか？…。」

「分かったよ」ニコッ

真実は弧華を桜の木の下に連れて行った。

「大丈夫？」

「ゲホッ！ゲホッ！…おう。」

「…もう…時間なのか？…。」

「ゲホッ！お前に…ゲホッ！これを…ゲホッ…やる。」

「えっ？」

スッ

弧華は片手に剣を出した。

「ゲホッ…俺の形見だと…思ってくれゲホッ！」

「弧華…。」

いやだ…消えるなんて…いやだ…。

ポロツポロツ

「弧…華…。」

真実の目には、涙が溢れていた。

「真実…ごめん…ゲホッ！」

「弧華…。」

「真実…俺は消えないよ…。」

「!?!?…。」

「大丈夫…俺はずっとお前のそばにいるよ…永遠に。」

「!?!?…弧華!…いや!消えないで!…」

弧華が足から消えていく。

「真実…。」

弧華が真実の頬に触れる。

「いやだ!…いなくならないで!弧華!…」

「…真実…約束。」

「えっ?…」

「いつかまた…会おうな」ニコッ

「私はお前が好きだ!だから…約束!絶対また会おう」ニコッ

「おう…。」ニコッ

弧華は消えた。

「サヨナラ…。」

最終章 桜の下の約束（後書き）

続編（特別編）小説でスタートします！
そっちのほうも応援よろしく！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4575u/>

桜の下の約束

2011年10月8日06時45分発行